講演会 薬名繰り返す

講師の医師 製薬会社から謝礼

「連呼・宣伝してない」「研究評価の表れ」

6医師が副収入3千万円超

医師が製薬会社から講演料として受け取っていた高額の謝礼。どのような講演会なのか。多額の副収入を得ているのはどんな医師なのか。

▼1面参照

東京都新宿区の高級ホテルで2月、胃の病気についての研究会が2日間にわたって開かれた。大手製薬2社と医師との共催。2日目の講演会では、司会役の医師が講師役の私立大教授の医師を紹介するとき、スポンサー名をあげながら、こう続けた。「多少はPRが入ってくるかと思います」

講師は共催2社が発売する薬の商品名を繰り返しつつ「この薬の時代がやってきた」と語った。会場にはイチゴのショートケーキとコーヒーが用意され、参加者は食べながら聴講。約40分の講演が終わっても会場から質問はなく、参加した約80人の医師らはすぐに部屋を後にした。

製薬会社主催の講演会は全国の病院や医師会館でも開かれる。製薬関係者によると講師役の医師への謝金は、教授クラスで15万～20万円、准教授は10万円。講師クラスだと5千円の場合もあるという。

一方で製薬会社主催の講演会は「主催企業の商品を批判しにくい」として、避ける医師も出てきている。

内閣府障害者政策委員会の委員で精神科医の上野秀樹さんは、2年ほど前までは製薬会社が関わる講演会を引き受けていた。3万円以上のタクシー代をもらったこともある。だが営業担当者から、講演で商品名を言うよう頼まれ、嫌気が差したという。いまは製薬会社がスポンサーの講演会は断っている。

上野さんは「製薬会社が営利企業である限り、講演会の建前が啓発であっても、利益に結びつけようとする。医師も、企業からボールペン1本をもらうのから始まり、徐々に感覚を鈍らされ、心を支配される。医師にその自覚がないことが問題だ」と指摘する。

英製薬大手のグラクソ・スミスクラインは2016年1月から、全世界で医師への講演料の支払いを中止する。同社の担当者は「専門医が薬の情報を正しく伝える講演の役割を否定するわけではないが、一般社会からみたら製薬会社主催の会はひょっとしてバイアスがかかっているのではという疑念を払拭したい」と説明。医師との癒着を疑われる余地をなくすためとしている。自社製品の情報を医師に伝える手段としては、インターネットの利用に力を入れていくという。

2013年度に製薬企業から3千万円以上の副収入を得た医師

万円以下は切り捨て

医師名（専門分野）所属	合計	うち講演料	上位3社	
河盛隆造（糖尿病）順天堂大特任教授	4747万円（21社）	4220万円（240件）	1 武田薬品工業	1423万円
			2 ノバルティス	836万円
			3 サノフィ	655万円
小田原雅人（糖尿病）東京医大教授	3971万円（25社）	3136万円（201件）	1 サノフィ	601万円
			2 ノバルティス	587万円
			3 日本ベーリンガーインゲルハイム	400万円
加来浩平（糖尿病）川崎医大特任教授	3719万円（23社）	1895万円（116件）	1 武田薬品工業	874万円
			2 ノボ ノルディスク	344万円
			3 アステラス製薬	262万円
山岸昌一（糖尿病）久留米大教授	3596万円（16社）	3121万円（194件）	1 日本ベーリンガーインゲルハイム	1000万円
			2 ノバルティス	840万円
			3 サノフィ	330万円
三鴨広繁（感染症）愛知医科大教授	3381万円（16社）	2384万円（152件）	1 大正富山医薬品	631万円
			2 ファイザー	492万円
			3 MSD	469万円
山下武志（循環器）心臓血管研究所長	3267万円（15社）	2585万円（168件）	1 日本ベーリンガーインゲルハイム	701万円
			2 ファイザー	606万円
			3 田辺三菱製薬	400万円

1千万円以上を得ていた184人は大学教授が多く、半数は糖尿病や高血圧など生活習慣病の専門医だった。最も多かったのは順天堂大学特任教授で糖尿病医の河盛隆造氏。240件の講演などで4747万円を得た。河盛氏は取材に「糖尿病の治療のしかたを教えている。薬の名前を連呼して宣伝したことはない」。一方で「市民公開講座や各地の医師会の講演に呼ばれて行ってみたら、メーカーから講演料が支払われていたということもよくある。手元に残るのは納税をして半分」などと話した。

2番目に多かった糖尿病医の小田原雅人・東京医大教授は201件の講演などで3971万円を得た。「講演会等は適切な情報提供に寄与する機会。大学病院の業務に支障を来さないように留意している」と説明した。

糖尿病医の加来浩平・川崎医大特任教授は116件の講演などで3719万円。「講演活動を地道にやってきて、治療レベルは相当に上がっている。依頼が来る人ほど見識があってメッセージ発信能力が高い」

194件の講演などで3596万円を得た山岸昌一・久留米大教授も糖尿病が専門。「これまでの研究が広く評価された一つの表れ。講演会の半分程度は土、日曜日。平日の場合は夕方からで、日帰りか翌朝に戻るので、業務に全く差し支えはない」

感染症を専門とする三鴨広繁・愛知医科大教授は、152件の講演などで3381万円を得た。「医師の報酬額は、1講演200万円以上のこともあるアナウンサーや著名人に比べると低い。しかもパワーポイントを100枚程度作成しなければならない。体力的に厳しい生活をし時間を捻出している。平均睡眠時間も4時間程度」と説明した。

循環器が専門の山下武志・心臓血管研究所長は168件の講演などで3267万円。朝日新聞の取材に「応じるつもりはない」と回答した。

（渡辺周）